＜調査研究シリーズ 125＞

エレーナ・キセリョーワについて

（ヴォローネジ州美術館，2019 年調査報告）

太　田　丈太郎

1.

ヴォローネジ市はモスクワから南へ約 530 キロのところに位置する。モスクワのカザン駅から二階建ての列車に揺られて，約六時間で到着する。南へ下るにしたがい植生が変わり，農地も黒く変わる。有名な「黒土」の彼方に，夕日の落ちる壮麗な眺めを車中で堪能することができる。

小ぶりな地方都市ながら，劇場や美術館が充実している。そういえばヴォローネジは，詩人オーシプ・マンデリシタームがラーゲリに送られて獄死する前の数年（1934−37 年）を過ごした場所である。小説家イワン・ブーニンやアンドレイ・プラトーノフ，児童作家サムイル・マルシャークとも深いゆかりのある街である。秋のシーズンが始まったばかりの劇場で，プラトーノフの戯曲『アフロディーテー』を観た。

2019 年 9 月 9 日から 11 日まで，熊本学園大学海外事情研究所の海外調査研究費助成を受けてヴォローネジ市に滞在した。二度目である。前年 18 年 9 月 8 日に，ヴォ

ヴォローネジ州美術館，エレーナ・キセリョーワの間（2019 年 9 月太田撮影）[1)]

1）以下，とくにことわりのないかぎり，撮影はすべて太田による。

ローネジ州クラムスコーイ記念美術館（以下，ヴォローネジ州美術館と表記する）に招かれて，日本にしめて三十六年滞在したロシア人画家ワルワーラ・ブブノワの業績について講演した。ブブノワの小展覧会が開催されたのである。それが機縁となり，このたびは美術館のコレクション，なかでも美術館がほこるエレーナ・キセリョーワ（1878−1974）という優れた女性画家の作品コレクションを調査・撮影することが許された。

ヴォローネジ州美術館の創設は，1933年と比較的新しい。旧ヴォローネジ県美術館のコレクションと国立ヴォローネジ大学の古代美術博物館のコレクションがまとめられ，そこにモスクワのトレチャコーフ美術館やプーシキン美術館，レニングラードのエルミタージュ美術館の収蔵品が加わった。古代エジプトや古典ギリシアにはじまり，中世ヨーロッパやルネサンスの展示品がある。数は少ないが，名称の由来であるクラムスコーイはもとよりレーピン（息子を殺したイワン雷帝の別バージョン），サヴラーソフのほか，クインジ，レヴィターン，セローフ，カローヴィン，さらにはレーリヒ（リョーリヒ）やドブジーンスキーなどの秀作がある。ヴォローネジのナチス占領期（1942−43），美術館のコレクションはオムスクに移送されていた。戦中，美術館の建物は火事で焼けたが，戦後の1952−53年に復元された。

ヴォローネジ州美術館にはしめて42点にのぼるキセリョーワの作品が所蔵されている。革命後に亡命し，外国で亡くなったため，キセリョーワはロシアでもあまり知られることがなかったが，近年とみに注目を集めている画家である。なかんずく，

《碧の花瓶を持つ画家，自画像 Художница с зелёной вазой. Автопортрет》(1910)

2016 年 12 月から翌 17 年 3 月にかけてモスクワの「ロシア印象主義美術館」で特別展が開催され，60 点にのぼるキセリョーワ作品が公開された。サンクト・ペテルブルクのロシア美術館，ロシア美術アカデミー付属学術研究美術館，ロシア語・ロシア文学研究所（「プーシキン館」）の収蔵品や個人蔵の作品が展示されたが，ヴォローネジ州美術館のコレクションが展覧会の主要な展示物となったことは言うまでもない。

本稿はキセリョーワの全貌を紹介するものではない。画家のキャリアのうちほんの一部を大まかに述べた試論にすぎない。キセリョーワをめぐる本格的な論考は，精緻なアーカイヴ調査を踏まえたうえで，今後の課題とすべきだろう。

2.

キセリョーワは 1878 年 10 月 27 日，ヴォローネジで生まれた。父親は数学者アンドレイ・キセリョーフ，代数学と幾何学の教科書の著者として有名だった。その教科書は 1960 年代までソ連で使われていたという。地元のギムナジウムを卒業後，首都サンクト・ペテルブルクのベストゥージェフ女子高等教育課程の数学科に入学したが病気に罹って中退，回復後に私立の美術学校で絵を学びはじめた。98 年秋，帝室美術アカデミー付属高等美術学校に入学，当初は画家ドミートリー・カルドーフスキーのアトリエに通ったが，1900 年からはイリヤ・レーピンに師事した。キセリョーワの入学と同じころ，美術アカデミーには版画家オストロウーモワ＝レーベジェワが在籍（1892−1900）していたことを想起したい。ブブノワが美術アカデミー付属高等美術学校に入学したのが 07 年であるから，キセリョーワはブブノワの約十年先輩にあたる。レーピンは教え子のうちキセリョーワを，オストロウーモワ＝レーベジェワほかと並んで優れた女性画家の一人に数えた[2)]。

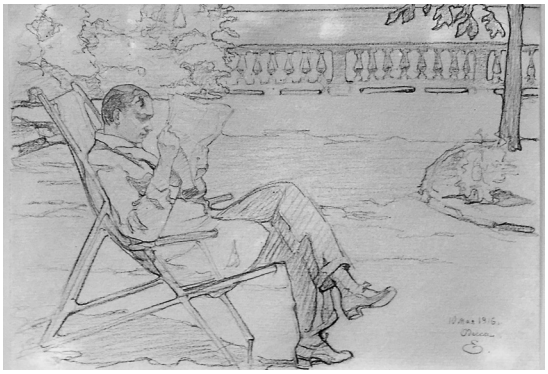
1903 年，ヴォローネジ市裁判所長の息子ニコライ・ペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイと結婚，夫とパリに滞在した。05 年春に再度パリを訪問，現地の美術アカデミーに通った。07 年，ヴォローネジ県の村で見た「トロイツァ」のお祭りをもとに描いた作品で芸術家の称号を得，女性としては初めて美術アカデミー奨学金給付生としてパリへ派遣される権利を得，翌年から第一次世界大戦の勃発するまで定期的にパリを訪問した。10 年代にはローマとフィレンツェを一人で旅した。

1910 年，雑誌『アポローン』が主催した「現代画家による女性肖像画」展に《麗しの紫陽花（美人のオルタンス）》を出品し，セローフ，クストージエフ，ボブロー

2）*Лунёва М.И.* Из переписки И.Е. Репина с художницей Е. А. Киселёвой// Памятники культуры. Новые открытия. Письменность. Искусство. Археология. Ежегодник 1992. М., 1993. С.288.

《麗しの紫陽花（美人のオルタンス）Прекрасная Гортензия（La Belle Hortense）》（1908）

フスキー，ウリヤーノフ，ソーモフ，スデイキン，ゴロヴィーン，バクストと並んで作品が誌上に掲載された[3]。ロシア語の画題は「紫陽花」とされているが，モデルの女性（オルタンスという名前か）を花に見立てたのだろう，胸元を覆う上掛けの色彩の斑点と白い肌が鏡に映りこみ，白い方形を積み重ねたかのような手前のドレスの襞と相まって，独特の効果をあげている。13 年，パリで《マルーシャ》を制作，また数学者のアントン・ビリモーヴィチと知り合い，二年後の 15 年，かれの住むオデッサへ移った。



アントン・ビリモーヴィチ（1916 年 5 月 10 日，オデッサ）[4]

3）*Маковский Сергей.* Женские портреты современных русских художников// Аполлон. 1910. №. 5. С. 5-22.
4）オリガ・マティチ氏より画像ファイルを提供いただいた。現物は氏が所蔵している。掲載許諾あり。2020 年 11 月 11 日付け、太田宛私信。

ロシア革命後ビリモーヴィチとのあいだに息子アルセーニーが生まれ，1920 年に一家はロシアを離れ，ユーゴスラヴィアのベオグラードへ移住した。最初の夫ペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイとの離婚が成立して，23 年 9 月，ビリモーヴィチと正式に結婚した。以後，おだやかな暮らしが続くかに見えたが，42 年に一人息子アルセーニーが妻イライダとナチスの強制収容所に連行された。二年後アルセーニーは生還したが，すぐ病没した。これを機に，キセリョーワは永久に画筆を折った。

キセリョーワがヴォローネジ州美術館上級研究員のマルガリータ・ルニョーワと文通をはじめたのがようやく 1967 年のことで，69 年にヴォローネジ州美術館でキセリョーワ最初の個展が開催された。画家は美術館に数多くの作品を寄贈し，それが今日美術館の所蔵するキセリョーワ作品コレクションの土台となった。74 年 7 月 6 日，画家はベオグラードで逝去した。享年 95 歳。80 年にはヴォローネジ州美術館で，キセリョーワ生誕百年を記念する大きな展覧会が開催された。

《トロイツァの祝日　Троицын день》（習作；1907）

3.

キセリョーワの作品を特徴づける要素はなにか。画家の全貌を見渡したわけではないが，ヴォローネジ州美術館のコレクション（常設展示されていない作品も含めて）を見たかぎりで言えば，第一に色彩の鮮やかさがあげられる。そして筆致の大胆さだろうか。その点キセリョーワは，師事したレーピンに代表される「移動派」の画家たちよりは次の世代のレヴィターン，カローヴィン，ないしはセローフ，バクスト，マリャーヴィンらの絵画に近い。西欧絵画で言えばゴーギャンやゴッホ，ないしはボナールやモーリス・ドニのようなナビ派に，画題や画法のうえでもっとも近接しているだろう。ポスト印象主義のロシア的亜流とすべきだろうか。キセリョーワの描いた農婦

《居室で，自画像 У себя. Автопортрет》(1908)

たちは「民衆」の生活に寄せる関心，「プリミティヴ」や「原始回帰」への視点のある点で，ゴーギャンの描いたブルターニュの農婦たちとパラレルな関係にある。

二十世紀初頭キセリョーワはひんぱんにパリを訪問したから，おそらくポスト印象主義の画家たちの「ジャポニスム」作品を目の当たりにしたことだろう。ゴッホやゴーギャンが背景やモティーフに日本の版画はもとより自作を引用したことは広く知られているが，キセリョーワが 1908 年にパリで制作した《居室で》に，おそらくポスト印象主義の余波が見てとれる。

場所はパリにあった画家本人のアトリエである。ひろくドアが開け放たれ，そこに画家自身とおぼしき女性がこちらを向いてにこやかに立っているが，問題は画家の姿やタッチではなく，いくつかの枠づけられた平面を並列的に配置した画面処理にある。開け放ったドアを中心に，向かって左に女性の後ろ姿を描いた絵画が置かれ，ドア上の小窓（人物が小さく映り込んでいる）の上になにやら地べたに座った人物像，そして右に三毛猫と黒猫の絵が配置されている。黒猫は三毛猫の影のようにも見えるが，歌川国芳の「猫づくし」や，歌川広重の錦絵（《名所江戸百景浅草田浦酉の町詣》など）に出てくる猫によく似ている。並置されたこれら「小窓」の絵は画家本人の作品だが，現在所在が不明である。ドア上の小窓に映り込んだ人物が中央の女性の影であるなら，いわばベラスケス風の「合わせ鏡」効果，視線の交錯も見てとれる。ドア向こうに見える空間の奥行きとあいまって，手前から無限後退する女性画家の鏡像が幻視される。

1896 年と 97 年，海軍将校セルゲイ・キターエフの日本美術コレクションの展覧会がサンクト・ペテルブルクとモスクワで開催されると，雑誌『芸術の世界』で活躍し

ていた画家たちを中心に日本美術熱が高まった。グラバーリやドブジーンスキーは錦絵を熱心に収集し，オストロウーモワ＝レーベジェワ（98 年から翌年まで，パリのホイッスラーに師事した）は江戸版画の手法を自作に応用した。

何年だったかよく覚えていないが，たぶん 1896 年だったかと思う，美術アカデミーのホールでキターエフによる最初の日本展覧会が催された。私は完全に圧倒された。新しく見慣れない，奇妙で思いがけない世界がそこにあった。それまで私は日本の芸術を知らなかった。フォルムと色彩のたぐいまれな美しさに魅せられて，私は展覧会に何時間も居座りつづけた[5)]。

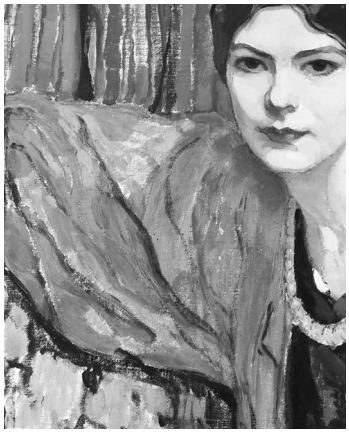
キセリョーワもおそらく，サンクト・ペテルブルクかパリで，日本版画の現物を目にする機会があったのではないか。《居室で》はそのような憶測と類推を惹起する作品である。この作品でキセリョーワは，1909 年にアルヒープ・クインジ協会賞を受賞した。

キセリョーワの画家としてのキャリアで特筆すべき作品が，やはりパリで 1913 年に制作された《マルーシャ》である。フォーヴィスム風にいくつもの束となって画布の上から下へなだれ落ちる滝のような色彩の奔流といい，大胆な筆さばきといい，まれに見るほど見事な画面である。おそらく，キセリョーワの生涯における一番の傑作だろう。

《マルーシャ　Маруся》（1913）

5）*Остроумова-Лебедева А. П.* Автобиографические записки. Л, 1935. С. 116.

赤を全体の背景にしながら，画布中央上の色のストライプが若い女性が羽織っている赤と金地の上掛けと濃紺のドレス，左手で触れている布の多彩な色へと集約され，あらたに展開していく。ソファーの濃紺と金地の装飾が，女性の赤と濃紺のコントラストを浮かび上がらせている。このような大胆な色のダイナミズムを支えているのが筆致である。



《マルーシャ》（部分）

画家の筆はこびをよく観察すると，画布の上から下に向けてごく大雑把に，一気に筆を描き下ろしていることがわかる。描き残された画布の地がかえって筆の上から下へのリズムを強調している。他方女性の顔や肌はごくフラットに，平面的に色が乗せられており，肌のきめ細かさを暗示する。上から下に下された左手を通じて，上から下への筆はこびが左から右への運動へ移行する。その横へのリズムは，女性の下半身のドレスの襞が波動のように伝える。画家の筆のリズムにしたがって，しぜん鑑賞者の眼は動くことになる。

《マルーシャ》（部分）

この作品は，1929 年に画家の母親によってヴォローネジ州美術館に寄贈された。画布に描かれたのはキセリョーワの知人だったロシア人画家の姉妹だというが，残念ながら姓名がわかっていない。寄贈された頃は芸術全般に対するイデオロギー統制が強まりつつあり，《マルーシャ》は腐敗したブルジョワ芸術として抹殺されるおそれがあった。館員たちはこの作品の運命を危ぶんで，裏階段の最上階に絵の表を壁に伏せて隠したという。ナチスが侵攻してきた 41 年，無事他の美術品と一緒にオムスクへ移送することができた。ナチス占領下のヴォローネジで美術館の建物は火災に遭ったから，ナチス以上に当局の思想統制を恐れた館員たちの機転が，この作品を救ったわけである。

わたしはいつも肖像画家でした，美しくて興味深い女性たちを描くことを熱烈に愛しておりました[6)]。

画家は手紙でルニョーワにこのように書き送ったというが，《マルーシャ》にこそ画家が対象に寄せる関心と情熱がいちばん露わに，華やかに具現されているだろう。

4.

ソ連の児童作家コルネイ・チュコーフスキーが最晩年の日記（1967 年 9 月 17 日）で，次のように記している。

エレーナ・キセリョーワ存命との手紙。代数学と幾何学の教科書編者の娘でレーピンの弟子。あのひととは 1915 年に激しい（そして短い）ロマンスがあった。あのひとが浜辺に出てきて，さしている赤い傘が見えると，わたしは動揺したのを覚えている。いま九十歳くらいだ。それでも，また赤い傘をさして海辺に出てきてくれるといいと思う[7)]。

1906 年からチュコーフスキーは家族とともにフィンランド湾の別荘地クオッカラ（現レーピノ）のダーチャで恒常的に暮らしていた。画家レーピンの家「ペナーティ」が隣で，老巨匠と家族ぐるみで親しく交友を重ねた。12 年には画家の援助で家を買った。レーピンの「水曜日」にはサンクト・ペテルブルクからシャリャーピンのような各界の名士たちはもとより，レーピンの弟子たちも集まり，お互いに絵を描いた。

6）*Матич Ольга*. Записки русской американки. М., 2017. С. 242.
7）*Чуковский К. И.* Дневник. Т. 3 : 1936–1969. М., 2012. С. 445.

その記憶はチュコーフスキーの文集『チュコッカラ』に生々しく残されている。その場で応酬された気の利いた冗談やアネクドート，即興の詩やスケッチを，チュコーフスキーは同席したひとびとに書いてもらった。チュコーフスキーとクオッカラを合成して『チュコッカラ』と文集名を考案したのはレーピンだった。

仕事の合間にレーピンは親しくチュコーフスキーを訪ねた。手を痛めて医者から週に一度絵を描くことをやめるよう言われていたとき，チュコーフスキーは画家の来る前にペンや鉛筆を隠してしまった。するとレーピンは，灰皿にあったタバコの吸い殻をインクに浸して，その場に居合わせた人々を描いた[8)]。

1914 年 8 月，第一次世界大戦がはじまったとき，レーピンはチュコーフスキーの部屋にいた。その日レーピンは七十歳の誕生日で，首都からお祝いを述べにやってくる客たちをうるさがって，避難していたのだ。レーピンの回想をつづりながら，チュコーフスキーはさりげなくキセリョーワの名前を書き加えている。

> そのとき私の部屋には演出家のエヴレイノフと画家のアンネンコフがいた。レーピンは二人に好意的だった。私たちは熱烈にお祝いを述べ，かれの言う希望をかなえてプーシキンを朗読しはじめた。レーピンは机に向かい，すぐ絵を描きはじめた。アンネンコフがその後ろを陣取り，レーピンを描きはじめた。これがレーピンの気に入った。かれはいつも他の画家たちと一緒に仕事をするのが好きだった（私も同席してレーピンは一度ならず，あるときはエレーナ・キセリョーワと，あるときはクストージエフと，あるいはブローツキー，パオロ・トルベツコーイと仕事をした）[9)]。

チュコーフスキーの日記に，「ロマンス」があったという 1915 年のエントリーはない。一年分まるごと記述が現存しない。最晩年のチュコーフスキー（当時八十五歳）に，キセリョーワが存命であることを誰が書いてよこしたのか。キセリョーワ自身だろうか。それにしても，浜辺で赤い傘をさした人妻とのロマンスとは，さしずめチェーホフの短篇のようである。

家族や他人の眼をおそれて，1915 年の記述をあとで抹消したのか。後に亡命することになった女性画家についての記述が妻の眼に対しても，また当局の眼に対しても危うく思えたか。青年期から日記をこまめに書いていたチュコーフスキーにしては，一年全部の記述が現存しないことは異様に見える。ただごとでない。

チュコーフスキーの手元に，キセリョーワが 1915 年に描いた肖像画があった。最

8）*Чуковский К.И.* Чукоккала. М., 1979. С. 89.

9）*Чуковский К. И.* Собрание сочинений. Т. 4. М., 2017. С. 408.

《コルネイ・チュコーフスキーの肖像 Портрет Корнея Чуковского》（1915）[10)]

晩年の 1960 年代，老作家は長年自分の秘書を務めてくれたクララ・ロゾーフスカヤにその肖像画を贈った[11)]。チュコーフスキーの没後，ロゾーフスカヤはアメリカに移住した。ボストンに在住していたが，2011 年に亡くなった。

キセリョーワとチュコーフスキーの「ロマンス」がどの程度のものだったのか判断するのは難しい。晩年まで肖像画を手元に残しておいたことからかんがみるに，キセリョーワとのいきさつは，チュコーフスキーには大切な思い出だったのだろうと推察される。キセリョーワがほかでもない 1915 年にサンクト・ペテルブルクを離れ，二年前にパリで知り合ったビリモーヴィチとオデッサで暮らしはじめていることも，「ロマンス」となにか関係があったのだろうか。いずれにしても，15 年当時，キセリョーワは最初の夫ペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイとうまくいかなくなっていたことは確かだろう。

とはいえ，キセリョーワとのいきさつにはこみ入った事情があって，画家がオデッサへ去っても後味の悪い後日談が続いた。記述は 1967 年から 1925 年にさかのぼる。キセリョーワの最初の夫について，チュコーフスキーは次のように特徴を日記に書いている。

10）Елена Киселёва. Элегантный век. Каталог выставки. 16 декабря 2016–12 марта 2017. М., 2016. С.70.

11）*Чуковский К. И.* Дневник. Т. 3 : 1936–1969. С. 576.

ニコライ・ペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイ（1878−?）[12)]

ニコライ・アレクサーンドロヴィチ・ペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイ。ペテルブルク大学をブローク［大詩人；1880−1921］と一緒に卒業。法律家。美男，驚くべき髪の分け目。現に知り合う［1917年5月］前にも，有名で才能ある画家の奥さん［キセリョーワ］の肖像でこの男の顔は知っていた。絵でこの男は純血種のフレンチ・ブルドッグ二匹と一緒に描かれていて，ノルウェーの公使かイギリスの小説家のように見える。文化や《血筋》などが感じられた。知り合ってみれば怠け者で穀潰しにすぎず，なにも読まず，自分の自動車と爪と髪の分け目のこと以外なにごとにも無関心で，奥さんのお金で暮らしていた。うぬぼれた面白くもない馬鹿，それでも人が良さそうには見える[13)]。

ロシア革命後，クオッカラは白軍の占領下にあり，チュコーフスキーは自宅の管理を法律に明るい隣人のペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイに委ねた。チュコーフスキーのコネのおかげで兵役義務を免除してもらったため，ペレヴェルターンヌイ＝チョールヌイはチュコーフスキーに恩義を感じていた。それでチュコーフスキーはかれに家と財産の管理を任せたという。1922年1月には，ペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイに求められて，財産管理委任状まで書き送った[14)]。ほんとうにキセリョーワと

12）Елена Киселёва. Элегантный век. Каталог выставки. 16 декабря 2016−12 марта 2017. С. 73.
13）*Чуковский К. И.* Дневник. Т. 2：1922−1935. М., 2012. С. 197.
14）Илья Репин−Корней Чуковский. Переписка. 1906−1929. М., 2006. С. 143.

「激しいロマンス」があったのなら，すでに夫婦関係が破綻していたとはいえ，その夫に財産管理を任せるチュコーフスキーの気が知れない。

チュコーフスキーはペトログラードから，クオッカラのレーピンと頻繁に手紙で連絡を取り合った。まず自分が校閲したレーピンの自伝出版をめぐる交渉があった。なによりもクオッカラの自宅のことが心配だった。1921 年後半から，ペレヴェルターンヌイ＝チョールヌイについて良くない消息をレーピンから受け取るようになった。かれがだいぶ前から分別をなくして，クオッカラの住人がボリシェヴィキの仲間であると疑ってかかるようになった。あるときなぞはレーピンがボリシェヴィキになったと列車のワゴンのなかで公然と大声で吹聴したが，言ったことの愚かしさにわれながら恥じ入ってしまい，レーピンを見ると，こそこそ身を隠すようになったという[15]。

1922 年 7 月に，ペレヴェルターンヌイ＝チョールヌイは外国へ去った。チュコーフスキーはレーピンの手紙から，クオッカラの自宅が目も当てられないほど荒らされてしまっていると知った。貴重な蔵書，手紙や原稿のたぐいも，荒らされたまま床に散らばっているという。

> ペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイは外国へ発つ前わたしのところへあなたの本を何冊か持ってきました。〈･･･〉つい最近確かなこととして聞いたのですが，かれはずっと前から豪華な装幀のあなたの貴重な蔵書を売りに出していたのだそうです。あなたの蔵書はすばらしかった！わたしはゾッとして，うずたかく積もったズタズタに引き裂かれた印刷物（装幀のあるのもないのも）と手紙の切れ端のあいだに歩をすすめると，ガラスの欠片が足下で音を立てるのです。野蛮極まりない！それも故意の！〈･･･〉[16]

1925 年 1 月，チュコーフスキーは革命後はじめてクオッカラを訪れ，実情を知った。ペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイは，委任状を利用してチュコーフスキーの持ちものを売り飛ばし，それで得たお金で死んだ愛犬（キセリョーワの描いた肖像画にあるフレンチ・ブルドッグ）のために葬式を執りおこない，お棺を注文して豪華な墓まで建てた。地元の顔見知りに聞くと，ペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイは「盗まれたから盗みかえしているのだ」と言っていた。「わたしがかれに盗みを働いたとでも？」「どうでしょうな」。

あつかましくこう言われて，わたしは背を向けてその場を去った。チョールヌイが

15） Там же. С. 134.
16） Там же. С. 157. 傍点はレーピンによる。

クオッカラの住民に盗みの言い訳をするために，わたしを「ボリシェヴィキ」だの「収奪者」だのと言いふらしていたのが明白だった。最低の悪党[17]。

ひょっとすると，ペレヴェールタンヌイ＝チョールヌイは，キセリョーワとチュコーフスキーとの「激しいロマンス」の腹いせに，悪事を働いたのではなかったか？元妻の描いたフレンチ・ブルドッグにかこつけて。

5.

アメリカ・カリフォルニア大学バークレー校の著名な研究者オリガ・マティチは，キセリョーワの二度目の夫アントン・ビリモーヴィチの縁者である。ビリモーヴィチが母方の大叔父にあたる。

2017年にロシア語で出た回想録によると，マティチは二人と1965年にベオグラードで知り合った。キセリョーワはマティチに，クオッカラでのエピソードを語った。恩師のレーピンのこと，お気に入りの教え子のキセリョーワに少しばかり言い寄ることもあった。マヤコーフスキーやチュコーフスキーのこと，あるとき三人で浜辺を散歩していると，マヤコーフスキーがいきなりつねってきた。チュコーフスキーと親し

アントン・ビリモーヴィチの肖像（1925，ベオグラード）[18]

17）*Чуковский К. И.* Дневник. Т. 2：1922−1935. С. 201.
18）オリガ・マティチ氏の所蔵。注4を参照。

くなった。夫ビリモーヴィチの手前のせいか，または女性のたしなみを慮ってなのか，キセリョーワはかれとの「ロマンス」をマティチに話していない[19]。

わたしたちはみな，一時期クオッカラに暮らしていました。クオッカラに住んでいたとき，わたしはレーピン（畏れおおいのですけれど），それからチュコーフスキーと親しくしていました。マヤコーフスキーとも会いました[20]。

1970年，九十二歳のキセリョーワは，チュコーフスキーの著書『レーピン』を読んで感激した。ヴォローネジ州美術館員のルニョーワが，キセリョーワにチュコーフスキーの本を送り届けたのだった。

『レーピン』を送っていただき，ほんとうにありがとうございます。人生の終わりに，たぶん自分の生涯最良のとき，別荘地クオッカラで偉大な先生レーピンのおとなりで，魅力的なおともだちのチュコーフスキーと一緒に過ごした昔を新たに体験できるとは，なんというしあわせでしょう。当時戦争がありましたが，レーピンのまわりにはいつも並外れたひとたちが集まっていました。あの頃はわたしもほんものの画家でしたけれど，あとでただの妻や母になり，逃亡生活があって，芸術からはほど遠くなってしまいました。この御本，よろこんで拝読いたしましょう[21]。

チュコーフスキーが晩年の日記に書き付けた「激しいロマンス」がいったいどのようなものだったかは，もはやわからない。妻の芸術家としての才能を理解しない穀潰しの夫への義憤をつのらせた騎士よろしく，作家が一方的に思いを募らせていただけか，あるいは画家が単に口にしなかっただけなのか。唯一，キセリョーワの描いた自分の肖像を贈った際に，チュコーフスキーが彼女とのいきさつを秘書のロゾーフスカヤに詳しく物語ったかもしれないが，そのロゾーフスカヤもこの世にない。

二人の恋がどういうものであったにせよ，後世のわれわれは，生涯の終わりにあたって思い出されたクオッカラでの日々から，二人の交情のこまやかさを偲ぶことができるだけである。人生の織りなすひとの機微を思えば，それで充分なのではないか。

19）*Матич Ольга*. Указ. соч. С. 240–241. マティチ氏本人にメールで確認したが，チュコーフスキーについて「友情」以外のことをキセリョーワは言わなかった。2020年11月11日付け，太田宛私信。

20）*Лунёва М.И.* Из переписки И.Е. Репина с художницей Е.А. Киселёвой // Памятники культуры. Новые открытия. Письменность. Искусство. Археология. Ежегодник 1992. М., 1993. С. 288.

21）Там же.

6.

最後に，ヴォローネジ州美術館に所蔵されているキセリョーワ作品を，美術館の学術研究員ナターリヤ・バーキナ氏からいただいた目録と，自分でも目で確認しえた情報をもとに，以下に記しておこう。世界各地に散逸したキセリョーワ作品が今後さらに「発見」され，目録が拡大することを期待する。キセリョーワの画業と生涯から，ロシアの「ディアスポラ」がパリやベルリン，ないしはアメリカのみでとらえられるものではないことが，あらためて痛感させられる。

Коллекция произведений Е. А. Киселевой в ВОХМ им. И. Н. Крамского

1．Маруся. 1913. Х., м. 135x 100. 89 Ж.［マルーシャ］
2．Шильонский замок. 1890-е. Бум. на картоне, акв. 15x19, 5. 1485 Ж.［シヨン城］
3．Декоративный фриз. 1910-е. Х., м. 20, 5x137, 5 1486 Ж.［装飾フリーズ］
4．Художница с зеленой вазой. Автопортрет. 1910. Картон, темпера. 49x35. 1487 Ж.［碧の花瓶を持つ画家，自画像］
5．В парке. 1908. Х, м. 125x150. 1488 Ж.［公園で］
6．Девушка в красном. 1906. Х., м. 164 x71. 1489 Ж.［赤い服の娘］
7．Женщина с лилиями. 1910-е. Бум. на картоне, пастель. 70x60 (овал). 1490 Ж.［ユリを手にした女性］
8．Женский портрет. (Портрет Арбузовой). 1910-е. Бум. на картоне, пастель. 70x55 (овал). 1491 Ж［女性像（アルブーゾワの肖像］
9．У себя. Автопортрет. 1908. Х., м. 77, 2x61, 5. 1492 Ж［居室で，自画像］
10．Город Будва. 1920-е. Х., м. 44, 5x58. 1495 Ж［ブドヴァ市］
11．Березы на Волыни. Польша. 1920-е. Х. на картоне. 44, 1x43. 1496 Ж［ヴォルィーニの白樺］
12．Портрет Антона Билимовича. 1925. Х., м. 77, 5x54. 1497 Ж［アントン・ビリモーヴィチの肖像］
13．Портрет сына. 1925. Х., м. 59, 5x50. 1498 Ж［息子の肖像］
14．Прекрасные дамы. 1927. Х., уголь, цв. карандаш 98x66, 2. 1499 Ж［貴婦人たち］
15．Базар в Которе. 1925. Х., м. 150x100. 1500 Ж［コトルのバザール］
16．Улица в Сараеве. 1920-е. Бум., цв. карандаш, пастель. 30, 2x21. 1501 Ж［サラエヴォの街］
17．Конавланка. 1920-е. Бум., цв. карандаш, пастель. 30, 2x21. 1502 Ж［コナヴレの娘］
18．Черногорка. 1920-е. Бум., цв. карандаш, пастель. 30, 2x21. 1503 Ж［モンテネグロの娘］
19．Мечеть в Сараеве. 1920-е. Бум., цв. карандаш, пастель. 30, 2x21. 1504 Ж［サラエヴォのモスク］
20．Конавланка. 1920-е. Бум., цв. карандаш, пастель. 30, 5x21. 1505 Ж［コナヴレの娘］

21. Мечеть в Сараеве. 1920-е. Бум., цв. карандаш, пастель. 21x30, 5. 1506 Ж［サラエヴォのモスク］
22. Девушки-мусульманки. 1920-е. Бум., пастель, цв. карандаш. 30, 2x21. 1507 Ж［ムスリムの娘たち］
23. Базар в Будве. 1920-е. Бум., карандаш, пастель. 21x24, 5. 1508 Ж［ブドヴァのバザール］
24. Далматинки. 1920-е. Бум., цв. карандаш, пастель. 30x21. 1509 Ж［ダルマチアの女たち］
25. Дачницы. 1915. Х., м. 107. 5x100. 1515 Ж［ダーチャの住人たち］
26. Портрет Андрея Федяевского. Картон, пастель, уголь. 73, 5x52. 1525 Ж［アンドレイ・フェジャーエフスキーの肖像］
27. Лилии. 1910-е. Х. на картоне, пастель, уголь. 54, 5x46, 5. 1526 Ж［ユリ］
28. Портрет Е.К Корякиной, урожденной Федяевской (1877-1919). 1909. Х., уголь, пастель. 104x70. 1527 Ж［Е. К. カリャーキナ，旧姓フェジャーエフスカヤ（1877 1919）の肖像］
29. Этюд. Натурщица. 1911. Х., м. 80x53. 1528 Ж［習作，モデル］
30. На балконе (Портрет Виктории Федяевской). 1910. Х., м. 125x107. 1558 Ж［バルコニーで（ヴィクトーリア・フェジャーエフスカヤの肖像）］
31. Натурщица с зеленой вазой. 1910. Х., м. 80x55. 1559 Ж［碧の花瓶を持つモデル］
32. Розовый зонтик. 1910. Картон, пастель. 49x70. 1560 Ж［バラ色の傘］
33. Прекрасная Гортензия. (La belle Hortense). 1908. Х., м. 147x112. 1562 Ж［麗しの紫陽花（美人のオルタンス）］
34. Троицын день. Эскиз. 1906. Х., м. 55x68. 1563 Ж［トロイツァの祝日，習作］
35. Троицын день. Эскиз. 1906. Х., м. 39x54. 1564 Ж［トロイツァの祝日，習作］
36. Женский портрет. (Портрет Татьяны Платоновой-Поздняк). 1910-е (?). Х., м. 95x80. 1572 Ж［女性像（タチヤーナ・プラトーノワ=ポズニャークの肖像）］
37. Blanche. 1912. Х., м. 93x64. 1580 Ж［ブランシュ］
38. Портрет Санди Хилл. 1910. Х., м. 81x54. 1581 Ж［サンディー・ヒルの肖像］
39. Портрет брата. 1890-е. Х. на картоне, м., 37x31, 5. 1582 Ж［兄の肖像］
40. Андрюша. 1890-е. Картон, графитный и цветной карандаши. 17, 5x17. 3546 Г.［アンドリューシャ］
41. Портрет матери. 1906. Бум. на картоне, графитный и цветной карандаши, пастель. 35, 2x26, 2. 3563 Г.［母の肖像］
42. Портрет отца. 1906. Бум. на картоне, графитный карандаш, пастель. 35, 2x 26, 2. 3564 Г.［父の肖像］

E. A. Kiseliova - Her Paintings Through Time (Report on the survey of her works in Voronezh, 2019)

Jotaro OHTA

Elena Andreevna Kiseliova (1878-1974) was born in Voronezh and died in Beograd. She was a talented painter of the "Silver Age" in Russia, one of Il'ya Repin's favorite pupils at the Imperial Academy of Arts. Her paintings were reproduced and mentioned in such journals as "Apollon", "Niva" and "Stolitsa i usad'ba" in the 1910s. After the Revolution, however, she emigrated to Yugoslavia in 1920, so for many years since then her works remained unknown to specialists in the Soviet Union until 1967, when Margarita Luniova, a senior researcher at the Voronezh Museum of Fine Arts, started correspondence with the painter. As the result of their mutual cooperation, Kiseliova's first personal exhibition was held in 1969 at the museum. Her "coming home" then started and now her heritage in fine arts has been revalued comprehensively. Recently, from December 2016 to March 2017 in Moscow, a special exhibition entitled "Elena Kiseliova - Age of Elegance" was held at the Museum of Russian Impressionism.

The presented article is a report on my visit to the Voronezh Museum of Fine Arts in September 2019, and my general survey of Kiseliova's works at the museum (42 works in total). The last chapter of the article is dedicated to a detailed list (in Russian) of her paintings and drawings. In addition, I have mentioned the painter's friendship not only with Il'ya Repin, her mentor, but also with Kornei Chukovsky, one of the great Russian writers after the Revolution. All of them lived in Kuokkala, a resort on the Gulf of Finland, and met each other frequently during 1915. Chukovsky, only two years before his death, wrote on the memory of "romance" with Kiseliova in his diary - "I've got a letter, according to which Elena Kiseliova is alive <...>, with whom I had a furious (and short) romance in 1915. I remember that I was excited to see her red parasol, with which she came out to the shore. Now she's around 90. Even so, I'd like to see her come out to the beach with that red parasol!" (Diary entry, September 17, 1967). Many years later, in 1970 after the writer's death, Kiseliova was very moved to read Chukovsky's book on Repin, cherishing the precious memory of their friendship, but, according to Olga Matich, a famous

American Slavist and a grand niece of Anton Bilimovich, the painter's second husband, she never mentioned the "romance" with the writer. Chukovsky's diary entries for the whole of 1915 are missing. He possessed his portrait, a drawing by Kiseliova, until the 1960s, but then gave it to Clara Lozovskaya, his secretary of 17 years. It's very possible that Chukovsky told her of the affair with Kiseliova in some detail, when he handed her the portrait, but Lozovskaya passed away in Boston, 2011, and now nobody knows anything about it.

I'd like to express my thanks to the curators at the Voronezh Museum of Fine Arts for their support of this research of Kiseliova's paintings and drawings–especially to Mrs. Natalia Bakina, scientific secretary of the museum, who kindly helped me make a list of the painter's works in Voronezh.